

遙かなる風雪

⑧

実録・柴田音吉洋服店

大正初期——とび切りのショートレングス



明治の末から大正のはじめにかけて、柴田の店では少しずつ、ラシャの販売も取扱うようになった。

音吉は、裁断裁縫の念入りなことはもとより、生地、付属に至るまで自信のある上等のものしか使わなかった。生地の吟味は特に慎重にしたから、質屋での値段さえ、ほかよりずっと良かったくらいである。

名のある実業家でさえ、洋服を3度裏返した時代、田中治三郎少年が、3度目の裏返し洋服を届けに行った先が、堂々たる広大な屋敷であることに感動したのも、ちょうどこのころだった。

3度裏返しても、シャンとしてくずれない生地を使う、これが音吉の建前であった。

そのためには、やはりどうあっても自分の手で服地を輸入したい、音吉の心にこの考えはひろがっていた。

× ×

大正元年8月9日、一人娘しげが、母のあとを追うように病没した。

しげに迎えた養子友蔵は、明治元年生れ、しげより6才年上の偉丈夫だった。音吉の眼鏡にかなっただけあって、友蔵は経営の才を持っていたが、興味は洋服より他にあるらしかった。かつての自分を振返った音吉は、友蔵に意の

音吉は孫たちに時代の先端をゆくハイカラな服装をさせることを楽しみみのひとつにしていた。

おもむく道を歩ませることにした。友蔵は⑧の名をもらい材木問屋をはじめ、これを成功させる。淡路島に、はじめて活動写真館を建てたのも、この柴田友蔵である。

すでに、しげと友蔵の間には7子があつた。そのうち長男の享一、4女の仲子、次男の英次は夭折した。

長女千代、次女静子、3女政子、5女寿栄はすくすくと成長、音吉の心を和ませた。

音吉はこれらの孫たちに時代の先端をゆく服装をさせた大きなリボンを髪に結び、フリルやギャザーのついたドレスを着せられた柴田の家の娘たちは、すれちがう悪童たちに石をぶつけられることもあつた。憧れと、その裏返しの反発が、おそらく悪童たちの心に交錯していたのであろう。音吉は晩年に至るまで、これら孫、そしてひ孫たちの服装に情熱のようなものをそそいでいる。音吉にとって洋服づくりは「天職」でもあり、生活そのものであつたようだ。

× ×

大正2年5月14日、19才になった音吉の孫娘千代は、島山忠を養子婿に迎えた。27才のちの2代目柴田音吉である結婚式には田中治三郎青年も列席した。

娘婿友蔵が材木商で成功す

るのを良しとした音吉は、忠を後継者と決めた。

東京外語大フランス語学科を卒業、政府派遣留学生として農商務省から辞令を受け、フランスへ留学して帰国した忠は、西欧の香りを身につけた好青年だった。

翌3年、現柴田商事、柴田音吉洋服店社長、高明さんが生れた。3代続いた女系家族に、待望久しい嫡男の誕生である。

一児を得た充足感に加え、卓抜な頭脳、語学力、西欧へ向ける若い目を持った忠は、音吉の意を受け、ラシャ輸入への足がかりを作っていた

英、仏から本格的に毛織物を輸入、これを国内に販売しはじめたのは次の年、大正4年からである。

大正の初め、スコッチツイード、ウーステッドなどのセビロ服地は1ヤールが1円80銭から2円30銭くらい、上物のショートレングスでは3円20銭から3円80銭くらいはした。

神戸では本田近造が、早くから英国商社オーガスト・ドローメーのエージェントとして少量ずつ色柄の違う服地を輸入していた。ショートレングスのはじめである。大阪で一着注文を受けると、もう他の店にはいかないといった「ほんもののショートレングス」を、この店では扱っていた

大阪では京町橋の栗岡南和軒、北浜の三宅洋服店などが、このショートレングスを仕入れていた。いずれも明治中期に出来た店である。

そんなころ輸入をはじめた柴田のショートレングスはとび切りのものだった。(つづく) 岡 和子記者